

おおとり会だより

女子大の閉学に当り 当時をふり返って

前女子大学長 内 蘭 耕 二

女子大最後の卒業式（第二〇回）と閉学式が、去る三月十四日、県立大学の大講堂で相前後して行われました。

短大時代から数えると四〇数年、女子大となつてからでも二三年という長い歴史の幕を閉じることになりました。

五年前、初めて女子大に赴任した時に、特にこれという覚悟も感慨もなかったというのが、正直な私の心のうちでした。それ迄、静岡県は私にとつては通過県にすぎませんでした。それ迄の八年間、私は隣りの県の岡崎市の愛知教育大学跡地に新構想の新しい大学レベルを抜いた研究所（文部省）の設立に骨折し、そのの生理学研究所長をつとめ、岡崎国立共同研究機構長となり、前後八年間、東名高速道路をかけぬけるものでした。

東京―岡崎間が三六〇km、毎週ここを走ると八年間では、お月さままで到着しているのではないですかと云ってくれた人がおりました。それ迄、私にとっては静岡県は全く未知の国でした。東名を通りかかると急に目がしみて悪臭が車内に吹きこんできました。

あわてて助手席の者に大声で窓を閉めろ

とわめいたのも一再ではありませんでした。丁度公害時代の真最中でした。日本の公害問題が全世界の注目をあびていた頃でした。

秦鴻四先生は私の古くからの友人で、長いおつき合いがあります。戦時中、海軍の研究所で席をならべて次来のことですから、かれこれ四〇年以上のことになります。

五年前の或る日、突然秦先生から電話があり、静岡へ来ないか、実はかくかくしかじかで女子大に関する事情の御説明をいただいた。「もう後四年で閉学が決まっているので何もすることは無い」というおすすめで、私は女子大へ赴任することになった。

しかし、一つの公的施設で歴史ある機関が、一朝一夕に改廃できるものではない。あれからの五年間、馴れない仕事との悪戦苦闘の連続であった。

先づ、私にとつては女子だけの大学は初めての経験であった。これ迄半世紀、私の目の前にあったのは男社会であった。これからは女社会である。私は女子大を引き受けるについて前任地の文部省の研究所の某局長に意見を求めた。



テレホンカード（カラー仕上げ）

「静岡女子大、いい大学ですよ。文部省でも注目していますよ」というのがこの局長の意見であった。しかし、このいい大学が既に閉学に決定しているとは腑に落ちなかつたが、私はこの一言で静岡に行つてみようかと思うようになった。

赴任してみると、これ迄私の不勉強であつたことが一遍に表に出てきて、これからの閉学に至る四年間は大変なことの連続であることが判つてきた。

事務引継に際し、小田幸雄前学長から文学部だけはつぶさないで欲しいと要請されたが、非力の致す所、それは実現されないうままに閉学の日を迎えてしまった。

寂しいかぎりの今日このごろである。

静岡女子大閉校に思う

森

主一（元学長）

わがオミナエシ

とこしえに

草薙の丘に咲いた花

嵐の中に散るとい

このオミナエシはあだ花か

それとも実結ぶ花なのか

はげしきものは興りしか(1)

こ女の望みはかないしか(2)

されど定めは はかなくて

花の命は尽くという

ひとつたび咲いたオミナエシ

たとえ花びら散ろうとも

種の命は燃え続く

おみなな行く手をともし火は

育てこの実をとこしえに

燃やせこの火を空高く

注・

(1)の文は、静岡女子大学の開学

にあたり、故高原博先生が詠ま

れた次の歌からとりました。

この拓きし丘にはげしきもの

興るといにはあらね花滴々

と

(2)の文は、「静岡女子大学学生

歌」の気持を歌ったものです。

(3)の「種」は、人それぞれに考

えはあろうかと思いますが、私

の気持としては、静岡女子大学のスピリットとでも言うべき、「女性教育研究センター」およびそれをめぐる事業のことです。



森主一元学長

内園耕二前学長

卒業式に出席して

女子大最後の卒業式ということで同窓生として出席させていただきました。

校舎は図書館を除いてすべてなくなっておりませんが、それでも今年までは在校生を残しており、「女子大」

がなくなると言われつつもまだ実感としてピンと来ない面がありました。

しかし今回最後の卒業生を送り出し、それに続く閉校式の場に臨み、おそらくこの思い出は数多い出来事の中でも特に印象深いものとして私の心



に刻まれるものと思われま

そして又、そんな私の感動的な思

いは無関係なくらいに淡々と進め

られていくセレモニーに、大きな時

代の流れというものを感じない訳には

いきませんでした。しかしその大

きな流れの中に「女子大」は確かに

存在したのであり、又その女子大で

青春のひとつときを過ごした私の中に

も、今まで以上に思い出深いものとして存在し続けていくことでしょう。

(大学食物科六回卒 清水美由紀)

三月十五日、女子大学の主催する

「閉学記念の会」が学かれ、会長、

副会長が招待を受けた。その席で大

学卒業生を代表して第一回卒の岡田

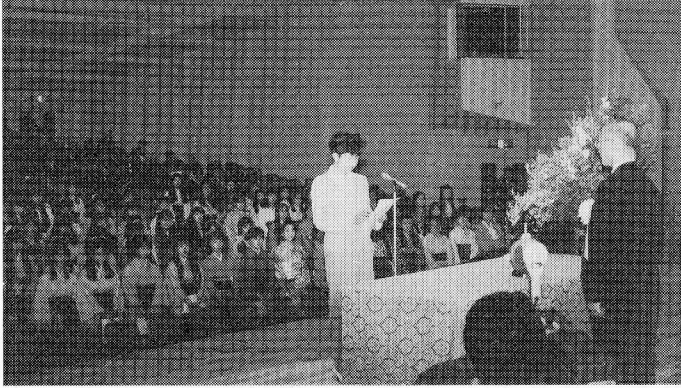
寿子副会長が挨拶した。(右上写真)

茶畑大学

23年間の歴史に幕

昭和五十七年九月十三日、私は京都の自宅にいました。静岡県が県立大学のありかたを見なおすための委員会を作ったという話を聞き、いろいろの情報を併せ考えて、これで女子大学はつぶされるな、という

ことを悟りました。この歌は、その時、私の真情を吐露して作ったもので、二、三時間で仕上げました。



さらば「お

卒業生の思いひとしお!

閉学式に出席して

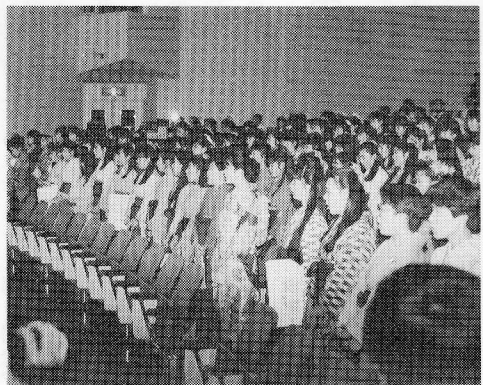
のは寂しいことですが、女子大の教育研究の精神は県立大に引き継がれ、さらに発展していくものと確信しています

三月十四日、静岡女子大最後の卒業式・第二十回卒業式が谷田の県立大で行われました。昭和四十二年四月の開学から、あまりにも早い閉学でした。「母校の名が消える

今日、いよいよ閉学式。堂々たる建物を見上げ、「もう私の知っている女子大ではない」とやや感傷的になりながら講堂に向いました。壇上の先生方も少しお年を召され、やはり二十年の歳月を感じざるを得ません。女子大最後の日には、もっとたくさんの方の先生方が拜見できるとかと思っておりましたが、意外に少なく「終りというのこんなものか」と寂しいものがありました。

閉学式に出席して

第一回卒業生というのは、ことさら母校への思い入れが深いのでしょうか。県立大に統合と決まるところで、その成り行きが気になるのでした。子供たちを連れ、となりの公園に遊びに行くたびに、だんだん出来あがっていくチョコレート色の校舎そしてある日、青空の下にその偉容のすべてが明らかになりました。



閉学式に出席して

「女子大がなくなる?」こう感じるのは、県立大学に関する県の方針を新聞記事で知った時です。六年くらい前のことでしたでしょうか。いよいよその日がやってきてしまいました。

平成二年三月十四日、閉学式が、装いを新たにした県立大学の学生ホールで催されました。

卒業生として閉学式に出席させていただきましたが、時代の流れとはいえ、母校の閉学には、一抹の寂しさを感じざるを得ませんでした。

「静岡県立静岡女子大学を閉学いたします」―会場に響いた閉学を伝える言葉が、今でも耳に残っています。

すっかり立派になった構内を歩いてみましたが、女子大の面影を残すものは何もありませんでした。

しかし、私達が女子大を卒業したことに変わりありません。学び舎はなくとも、学生生活を送った中で得た多くの師・友・先輩・後輩など、有形、無形のもものが私達の中に生きづいています。

卒業生の同窓会、おおとり会もあります。会員相互の交流を深め、いろいろな活動をしていけたらと思います。

今日は、いよいよ閉学式。堂々たる建物を見上げ、「もう私の知っている女子大ではない」とやや感傷的になりながら講堂に向いました。壇上の先生方も少しお年を召され、やはり二十年の歳月を感じざるを得ません。女子大最後の日には、もっとたくさんの方の先生方が拜見できるとかと思っておりましたが、意外に少なく「終りというのこんなものか」と寂しいものがありました。

（大学英文科一回卒 中野新子）

（大学英文科一回卒 中野新子）

（大学被服科十一回卒 仁科智美）

〓 旧交をあたためて 〓

昨年五月、雨あがりの日曜日の昼、英文科一回生は三年ぶりに同期会に集まりました。県立大が建設され、美術館が開館になり、すっかり様が変わりした谷田の丘の和風レストランに集まること十余名、久しぶりの再会に話の花が咲きました。来ていただいた小泉先生のなつかしいウィットに富んだ近況報告は、私たちを学生時代に戻ったような気持ちにしてくださいました。

美尾先生は、女子大閉学から県立大の今の様子までを話してくださいました。時勢の移り変わりに逆らうことはできないにしても、閉学には寂しさを感じながら先生のお話をうかがいました。次に参加者の近況報告。驚いたことに、参加した十余名の全員が、中学・高校・大学の教員だったり、公文式教室の先生だったり、塾を持っていたりと、何らかの形で教育に携わっていました。皆、第二の成人式を迎え、来し方の人生をふりかえって、今できることを精いっぱいやり、生活を充実させている同級生の様子に励まされ、新たなファイトを燃やすことができたひとときでした。

第一期生はなかなか結束が固く、三年毎ぐらいいく集まります。県内在住者が比較的多いこともあるの

あれこれインフォメーション

同窓会室のご利用を!

春夏秋冬、いずれの季節にも恵まれた環境にある同窓会室、オープン以来当番制で管理していますが、四月より週一回(火)のみ、第一週英文科、第二週国文科、第三週被服科、第四週食物科、地元同窓生が大変協力的で助かります。(十時~二時在室)

遠方の方もぜひクラス会や小人数のおしゃべり会、趣味の会など開き、永く県大との関わりを持つ為にも大いにご利用下さい。学生食堂や売店もあります。室内にも湯茶の支度は整っていますのでご自由にお使い下さい。又、鍵は大学事務局(管理棟)にありますので寄ってからお入室を。

かも知れませんが、在学中も一期生という事で何かと力を合わせてつくりあげなくてはならないことが多かったからだと思えます。短大時代の名残りの修学旅行にも二年生の時には行きました。又、科をあげて、英語劇の独立公演を苦勞して実現させたりもしました。

お互いに良い刺激を与えあうためにも、次回の再会の時が待たれます(大学英文科一回卒 岡田寿子)

〓 テレホンカード発売 〓

閉学記念のテレホンカードの作成の計画に参加し、旧女子大の白亜舎と緑濃い前庭の美しい写真のカードです。六月総会時に頒布の予定。尚遠方の方は同窓会事務局へハガキでお申込み下さい。(一枚二〇〇〇円)

〓 イベント係より 〓

A 俳句への招待

関森先生のご指導のもと、専門的(現在は芭蕉について)お話から俳句を作る楽しさも堪能でき、素晴らしいひとときが過ごせます。途中入会でも一向に構いませんので、多くの参加を望んでいます。

B 「生活文化ゼミなる」

県大生活科学研究センター長、立田洋司先生の呼びかけで四月開講、

総会だより

平成元年六月四日(日)恒例の総会が県立大小講堂にて開かれました。

講師・富永久雄氏(マリオン編集長)をお迎えし、演目「女性と新聞」特に身近な週間誌の話題で実にしたのしく、ステキな話術に魅了された。恩師十三名、会員一八五名と会場いっぱい。昼食は見晴らしのいい学生食堂でなごやかに談笑ノ

(本年度総会案内は別紙参照) おおとり会も協力の方向にもついで

くよう話し合い、参加者募集中。

〓 一九九〇年度のテーマ 〓

「生活の中にきりりとした潤いを」前期・伝統の記憶、後期・美的感性の浸透

会場 県立大 五二一教室
時間 午後一時半~三時
参加費 前期・後期とも各千円

竹沢まで



閉学式後、県知事、学長、恩師を囲んで

(計報)

県大名誉教授の実藤 玄先生は、病氣療養中のところ平成二年二月二日ご逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。